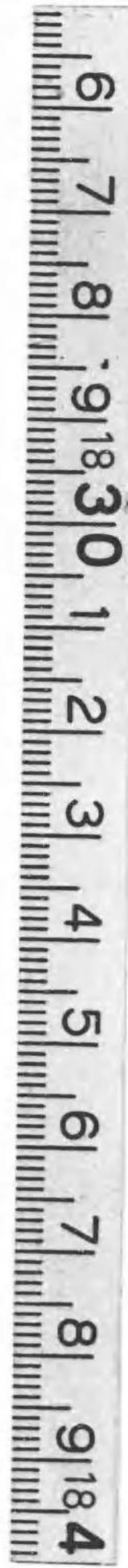


特242

540

前田本枕草子解説

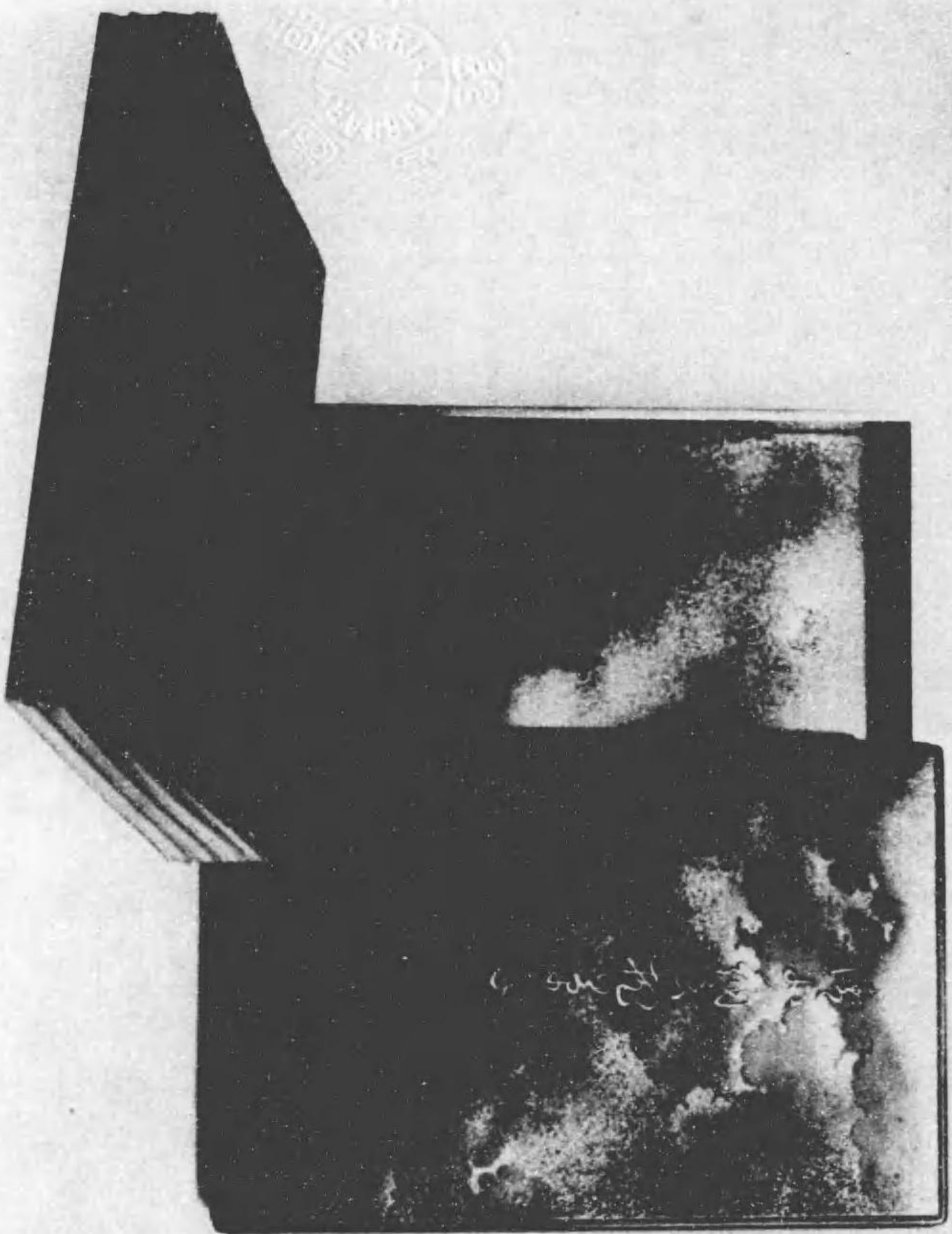


始





242  
540



箱のそと子草枕本田前



前田本枕草子解説



清少納言の枕草子には、多くの異本が傳へられてゐるが、今回尊經閣叢刊  
丁卯歲刊行の一として複製された枕草子は、他に未だ同系統の本を見ざる  
特殊なる一本である。この原本は、前田侯爵家の秘藏に係るもので、現存の  
枕草子古寫本中最も古いものゝ一である。

前田本枕草子は、四冊から成つてゐて、各縦七寸八分、幅五寸一分五厘の鳥  
の子に寫された胡蝶装の古雅な寫本である。表紙は蔓牡丹の模様ある萌  
黄地緞子、見返紙は金銀の砂子に、草花文様を施してある。各冊共に題簽も  
なく又内題もない。一冊は、はるはあけほのに始まり、墨付四十六枚、白紙六  
枚、一冊は、めてたき物に始まり、墨付七十四枚、白紙七枚、一冊は、正月一日に始





まり、墨付八十枚半、白紙五枚、一冊は、小白河といふに始まり、墨付七十八枚、白紙五枚から成つてゐる。

原本を納めた箱は二重になつてゐて、内箱は金銀村濃梨子地に雲形を表はした蒔繪で、その蓋の表面中央に金象眼で「清少納言枕草子」の七字を嵌めてある。箱の内面も、表面同様の金銀梨子地で、いづれも精巧なものである。外箱は桐で、これには後人の手蹟で「清少納言枕草子四冊」とあり、更に小さく下部に筆者不知と認めてある。

枕草子はもと如何なる名をもつて呼ばれたのか明かでない。記録に残つてゐる古いものには「清少納言記」禁秘抄 八雲抄とも、「清少納言枕草子」仁和寺書 目錄、源氏物語とも呼ばれてゐる。前田本には、この稱呼を立證するやうな明かな外題がないけれど、内箱の標題に「清少納言枕草子」とあつて、略して「清少納言」とか、或は「枕草子」とかのみ呼んでゐないのは、やはり古體を存してゐるものに見えるべきではなからうか。

この寫本の筆者は何人であるか明かでない。書寫の年代もまた同様に未詳である。傍證となるやうな奥書もなければ書入もないので、さう云ふ方面から、筆者又は書寫年代を斷定することは不可能である。從來筆者について語られたものに二説がある。その一は、古筆了祐の鑑定で、二條爲氏の眞筆であるといひ、今一は、全國寶物取調掛の鑑定で、民部卿局の眞蹟であるとす兩説である。しかし是等の説も、別に確かな證據があつての立論ではない。従つて今まで發見された資料のみでは、何人の筆であるかはつきりと斷定することは困難である。しかし筆蹟の特徴若しくは紙質等の點から推察すれば、他に確證がないまでも、少くとも鎌倉中期を下らざる書寫であることだけは斷言出来るであらう。

この本は、前述の如く外題もなく奥書もないから、傳來の系統を明かにすることは勿論出来ないが、しかし前田家に入つたのが、少くとも寛永六年以前であつたことは信すべき理由がある。それは寛永六年四月廿三日家君



御元服記といへる前田家の舊き記録に、陽廣公光高元服して筑前守となりし後同月廿六日、將軍家光廿九日前將軍秀忠が同邸に臨みし際、二階の書院床に、藤原定家自筆の土佐日記を飾り、床脇左の下棚に、この枕草子を蒔繪の箱と共に飾つたことが見えてゐるからである。即ち本書は、松雲公以前に於て前田家に入り、寛永六年の頃已に古筆として珍重せられた本であることを知るのである。なほ又、蒔繪の箱といふのが前に云つた現在の内箱と思はれるので、それが様式からしても推定される通り、この書付を得ていよ／＼寛永初期の作品として珍重されることになる。蓋表の「清少納言枕草紙」の象眼金文字にも當時の書家松花堂の筆意が見える。

## 二

清少納言枕草子は、古典中稀に見る多くの異本を傳へてゐる。從來最も一般的に流布した本は、北村季吟の春曙抄本で、これについて慶安刊本、古活

字本、岡西惟中の旁註本、加藤盤齋の校訂したと云はれてゐる所謂萬歳抄本、群書類從四百七十九所收の後光嚴院宸翰本、泉州堺から出たと傳へられてゐる所謂堺本、及び安貞二年の奥書を有する毫及愚翁校勘の所謂三卷本等である。

これ等の諸本には、相互に字句の異同あるのみならず、章段の順序にも同様出入がある。今章段の立て方よりのみ考ふれば、大體三の系統に區別する事が出来る。第一は春曙抄系統の本であり、第二は三卷本系統の本であり、しかしして第三は宸翰本系統の本である。

右三系統の中、第一と第二とは、章段の數及び順序に於て相當類似した關係を有してゐる。古活字本や、慶安の刊本等は、春曙抄とほぼ同様の系統に屬する本である。三卷本は三卷三冊或は四冊に分れてゐて、春曙抄よりも正しい本文を傳へてゐるかの如く思はれるが、後世あまり行はれなかつたらしく、今日わづかに數部の寫本をのこすにすぎない。この本と、春曙抄との主な



る相違點は、第三卷目書首おほきの章段の順序は、春曙抄本と相違して、多くの類似點を有しないのである。この本の奥書には次のやうに見えてゐる。

本云 往事所持之荒本紛失年久、更借出一兩之本、令書寫之、依無證本不散不審、但管見之所及、勘合舊記等、注付時代年月等、是亦謬案歟

安貞二年三月

老及愚翁在判

とあり、更に

文明乙未之仲夏、廣橋亞槐送實相院准后本下之本、未兩冊見、示曰余書寫所希也、巖命弗獲、點馳禿毫、彼舊本不及切句、此新寫讀而欲容易、故比校之、次加朱點畢

正二位行權大納言

藤原朝臣教秀

とあつて、奥書を有する傳本としては最も舊いものゝ一である。尤も老及愚翁と稱する人は如何なる人であるか明かにされない。しかし他に有

力なる反證のあがらない限り、これ等の奥書は信すべきである。

次に宸翰本は異本枕草子ともよばれその奥に、

這本以 後光巖院宸翰不違一字書寫功了

右清少納言枕冊子原爲一冊、標題無之、半面十一行書之、今分上下加題目且文章之中、雖有可疑者、以謂 後光巖院宸翰不違一字書寫、不敢改之、如假名遣亦偏任本畢

とあるのであるが、この系統の本は、前の系統の二本とは全く異つたもので、字句はもとより、章段の數及び順序もいちじるしく相違してゐる。第一第二の系統の本は、何の用意もなく、雜然と條項を書き並べただけであるが、この本には一の組織がある。即ち記事の分類が三部に分れてゐて、第一類は天地自然の現象又は事物に關するもの例へば春は、風は、家は、馬、第二類は人間の情意に關するもの例へば、めでたき物、くちをしき物、心もと、第三類は、四季の興趣に關するもの例へば、正月一日は、三である。これ等の分類は、一つの



組織によつて輯録されてゐる。即ち第一類から第二類を経て、しかして第三類に及ぶといふやうな秩序を有するのである。

この宸翰本は流布本に比して著しく章段が少いのであるが、この本が如何にして成立したか、換言すれば、この本は流布本から抄録したものであるか、或はある完本の残欠であるか、重大な問題ではあるけれども、今の所ではいづれとも断定し難い。この問題に少しくふれると思はれるのは、同じ系統の本であるらしい所謂堺本の存在である。春曙抄及び群書一覽に

又一本上下二冊堺本とて宮内卿清原氏の奥書あり。發端より一紙がほどはよのつねの本に大かた似て、其次枕詞の次第など大に異なり云々と見えてゐるのが即ち堺本である。

堺本はその奥書に

(前略)泉のさかるに世をそむきたるわさしていとまあるを幸として好事の佳(カ)士道巴といふ翁の心の月をすまして身のさとり明かなるか

持なれたる本をしはし借もちひて書寫せしむる處也云々

とあるによつて名づけられた異本である。この本はほとんど世間に流布しなかつた本で、今でも傳本の數は甚だ稀である。その理由は、春曙抄本が、枕草子の定本の如く一般に流布したためであらうが、今一の理由は、宸翰本又は堺本はある祕庫に納められて、容易に外に出ないやうな事情があつたではなからうか。

宸翰本と堺本とは、最も親密な關係を有する本であるが、その主なる相違點は章段の數である。即ち宸翰本は「春はあけぼの」の項にはじまり、七月十日日ばかりのひざかりの」の項で終つてゐるが、堺本はその後につづいて、七月十日つごもりがたにはかに風いたう吹きて云々の文に連り、多くの四季の情趣を叙し、更に人事上のあはれなることどもに對する感想を記し、最後に例の衛門佐のふかた一本にはありが美々しく装つて御嶽に詣でた事實を書き、これはをかしき事にもあらず、あはれなる事にもあらず、めでたき事に



もあらねど、ただ其比耳にとまりし事を書きたるなりとのべて巻を終つてゐる。

以上のやうな章段の立て方から考へて見ると、この二の系統の本を別系統の本であるとはなし難い。又宸翰本一のみについて考へて見ても、あの本がそのまゝ完本であるとは考へにくい。むしろ宸翰本は堺本系統の本の缺本であるやうに考へる方が至當ではなからうかと思ふ。

## 三

前田本枕草子は、以上述べた三系統の傳本中、いづれに屬すべき本であるかと云ふに、その章段の順序から云へば、第三系統即ち宸翰本又は堺本の系統に近い。しかし詳細にその順序を検べて見ると、これまた決して同様でなく、可なり著しい相違點が見出されるのである。即ち宸翰本或は堺本の前半は「春はあけほの」にはじまり、ころは「せちは「ふる物は「風は「霧は「木の花は

「花の木ならぬは等四季、自然現象等から、動物植物家屋調度服装等に至るまで、雑然と羅列してゐるに對し、前田本の一冊春はあけほのの冊には「春は」に始まり、ころは「夏は」「冬は」「日は」「月は」「ほしは」「雲は」「かぜは」等先づ四季天文又は自然界の現象等についてのべ、次に「山は」「みねは」「をかは」「野は」「はらは」「もりは」等地理又は地理的な事項について記し、次に「せきは」「むまやは」「わたりは」「はしは」「みささぎは」等家屋土木等の事項に及び、更に「木のはなは」「草の花は」「くさは」「とりは」「むしは」等動植物のこと、神佛に關すること、職業に關すること、人間の好尚に關すること、又は服飾調度に關すること等に互つて記し、しかもその間に整然として秩序ある分類と組織とを有する。

次に本文の字句の異同の點から考へて見ても、全然同一系統の本とは云へないので、例へば「めでたき物」の條の一部分を兩書について比較して見ると、宸翰本には

后宮はしめ又やかて御うふやのありさま行けいのおりなと御こしよ



せて名たいめんなどしたるほといとめてたしそのころ一の人の御かすかまうてさらぬ御ありきもめてたし今上一宮などやうにやむことなきみこたちのまたわらにはおはしますをいたきあつかひたてまつる御おほちはさらなりおちなとにてもみたてまつりたまへる氣色こそよにめてたけれ御むまひかせて御らんし殿上人くら人などめしつかひあそはせ給ふほとたとよそ人もみたてまつるはけにこそまつえましけれ した地のらてんのはこ からくみ よくそめたるむらこのいとひきときてみたる心地 からにしき かさりたち 六位くら人いみしき君たちといへとえしもき給はぬあやをり物を心にまかせてきるよりはしめて御かとにちかくなれつかうまつるさまなどのいとめてたき也御ふみかへせ給へは御すりのすみする夏は御うちはまいるそれのみならずいとめさましまてみゆることゝもこそおほゆれ云々

とあるが前田本には前の方の文は小さく分れて各所にはいつてゐて、全く比較の出来ない出入を示してゐる。前田本には

からにしき かさりたち つくり佛のもくゑ いろあひよくはなふさなかくさきたるふちのまつにかゝりたる 六位のくら人こそなほめてたけれいみしき君たちなれとんえしもき給はぬあやをり物を心にまかせてきたるあをいろすかたなどのいとめてたきなりところのさうしきのたゝの人の子ともなとにてとのはらのさふらふに四位五位六位もつかさあるかしもにうちゐてなにもみえさりしくら人になりぬればえもいはすそあさましようめてたきせんしもてまいりたいきやうのをりのあまくりの使なとにまいりたるをもてなしきやうよし給さまはいつくなりしあまくたりの人ならんところおほゆれ云云

とあつてこの二の本が同系統の本でないことを明かに立證してゐる。



この本文はむしろ春曙抄系統本に近い本文である。

次にこの本と春曙抄本との関係を見るに、重大な相違點は章段の數とその順序とである。この方面より見れば、兩本は全く系統を異にする本と認めざるを得ない。又これを本文について考へると、前田本には春曙抄本に類似した所も相當に多く存するが、しかし全然同系統の本とは決して云へない。例へば開卷第一にある一段を比較すると春曙抄本には

春はあけぼのやう／＼しらくなりゆく山ぎはすこしあかりてむらさきだちたる雲のほそくたなびきたる 夏はよる月のころはさらなりやみもなをほたるとびちがひたる雨などのふるさへおかし 秋は夕ぐれ夕日はなやかにさして山ぎはいとちかくなりたるに鳥のねどころへゆくとしてみつよつふたつなどとひゆくさへあはれなりまいて雁などのつらねたるがいとちひさくみゆるいとおかし日いりはてゝ風のをと蟲のんねなどいとあはれなり

とあるに對し前田本には

はるはあけほのそらはいたくかすみたるにやう／＼しらくなりゆくやまきはのすこしつゝあかみてむらさきたちたる雲のほそくたなびきたる夏はよる月のころはさらなりやみもほたるのほそくとひちかひたるまたたゝひとつふたつなどほのかにうちひかりてゆくもおかしあめなどのふるさへをかし 秋はゆふくれゆふひのきはやかにさして山のはいとちかくなりたるにからすのねにゆくとて三四二三なととひゆくさへあはれなりましてかりなどのつらねたるかいとちるさくみゆるおかし日のいりはてゝかせのをとむしのねなとはたいふへきにあらずめてたし

とあつて、むしろ宸翰本に類似した本文を有してゐる。又例へば「草の花は」といふ條について見るに春曙抄本には

(前略) あしの花さらに見どころなけれどみてぐらなといはれたる心



ばへあらんとおもふにたゞならずもすゝきにはをとらねど水の  
つらにておかしうこそあらめと覺ゆこれにすゝきをいれぬいとあや  
しと人いふゆり秋の野のをしなべたるおかしきはすゝきにこそあれ  
ほさきのすはうにいとこきが朝きりにぬれてうちなびきたるはさば  
かりの物やはある秋のはてぞいと見ところなき色々にみたれ咲きた  
りし花のかたもなくちりたるのち冬のすゑまでかしらいとしろくお  
ほどれたるをもしらでむかしおもひ出がほになびきてかひろぎたて  
る人にこそいみじうにためれよそふる事ありてそれをしもこそあは  
れとおもふへけれ萩はいといろふかくえだたをやかにききたるが朝  
つゆにぬれてなよくとひろごりふしたるさをしかのわきてたちな  
らすらんも心ことなりからあふひはとりわきて見えねと日のかげに  
したがひてかたふくらんぞなべての草木の心とも覺えておかしき花  
の色はこからねどさく山ふきにはいはつゝじもことなる事なければど

おりもてぞ見るとよまれたるさすがにおかしさうびはちかくて枝の  
さまなどはむつかしけれどおかし雨などはれゆきたる水のつらくろ  
ぎのはしなどのつらにみたれさきたる夕はえ

とあり前田本には

(前略) あしのはな これにすゝきをいれぬいといみしうあやしとい  
ふゆり秋野ををしなへたるをかしさはすゝきこそあれほさきのいと  
こきすわうにてあさきりにぬれてうちなひきたるはさはかりのもの  
もやはある秋のはてぞいとみ所なきいろ／＼にてみたれさきたりし  
はなのかたもなくちりにたるのち冬のすゑまでかしらのいとしろく  
おほとれたるもしらすむかしおほえかほに風になひきてかひろきた  
てる人にこそいとようにためれよそふる心ありてそれをしもそあは  
れとおもふへけれからあふひは花のさまいろあひとりわきてもみえ  
ぬをひのかけにしたかひてかたふくらんこそなへて草のこゝろとも



いふへくもあらずいみしうあはれなれ

とあるのであつて、こゝはむしろ三卷本の本文と系統を同じくしてゐる。かく前田本が春曙抄系統の本でないことは明かであるが、しかしそれかと云つて、全然三卷本系統の本であるとは斷言出来ない。それは先づ章段の數と順序とに於て根本的な相違を有する上に、字句に於て可なり大きな相違が見出されるからである。例へば「佛は」といふ條について見るに三卷本には

如意輪 千手 すへて六観音 薬師佛 釋迦佛 彌勒 地藏 文珠  
不動尊 普賢

とあるに對し、前田本には

如いりん人をわたしかね給てつらつえつきてなけき給かいとかたち  
けなくあはれなるなり 千手観音すへて六観音 やくしほとけ 彌  
勒 かうさんせはみめはおそろしけにおはすれと御ちかひのたのも

したてたるもいとつきくしかめり 釋迦佛 ふとう もんしゆ

地藏并

とある。これは一例にすぎないが、かゝる例でも分るやうに、前田本は決して三卷本系統の本とは云へない。

以上述べた如く、前田本は三の系統の異本中いづれにも屬しない全く第四の異本であるのみならず、他に一として類似の寫本を傳へない全く唯一無二の寫本である。そこに枕草子研究の新資料としてのこの本の學問的價値が存するのである。

四

前田本枕草子は、上述の如く、從來の諸本にない特殊なる性質をそなへた珍しい寫本である。ある箇所は春曙抄に、他の箇所は堺本に、又他の箇所は三卷本に共通點を有しながら、しかもなほかつそれ等の一にも偏しない所



がこの本の興味ある特質である。

本文中取扱はれた項目は、春曙抄本に比較してやゝ少いのである。春曙抄本にあつて、前田本に見えない項目の中で主なるものをあげると例へば

大進生昌が家に宮の出でさせ給ふ云々の條 (春曙抄卷二)

うへにさぶらふ御猫はかうぶり賜はりて云々の條 (春曙抄卷二)

小一條院をば今内裏とぞいふ云々の條 (春曙抄卷三)

職の御曹司の西おもての立部云々の條 (春曙抄卷三)

殿上の名對面こそなほをかしけれ云々の條 (春曙抄卷三)

職の御曹司におはしますころ木立など云々の條 (春曙抄卷三)

頭中將のそゞろなる虚言を聞きていみじう云々の條 (春曙抄卷四)

かへる年の二月二十五日に宮職の御曹司に出でさせ給ひし云々の條

(春曙抄卷四)

里にまかでたるに殿上人などのくるも云々の條 (春曙抄卷四)

さてその左衛門の陣にいきてのち云々の條 (春曙抄卷四)

職の御曹司におはしますころ西の廂に云々の條 (春曙抄卷四)

無名といふ琵琶の御琴をうへのもて云々の條 (春曙抄卷五)

御めのとの大輔けふ日向へくだる云々の條 (春曙抄卷六)

雨のうちには降るころ云々の條 (春曙抄卷六)

方弘はいみじく人に笑はるゝ云々の條 (春曙抄卷六)

卯月のつごもりに長谷寺にまうづとて云々の條 (春曙抄卷六)

八幡の行幸のかへらせ給ふに女院の御棧敷云々の條 (春曙抄卷七)

七日の若菜を人の六日にもてさわぎ云々の條 (春曙抄卷七)

頭の辨の御許よりとて主殿司繪などやうなる物を云々の條 (春曙抄

卷七)

などてつかさ得はじめたる六位の笏に云々の條 (春曙抄卷七)

故殿の御ために月ごとの十日御經佛供養せさせ云々の條 (春曙抄卷



七)

頭の辨の職にまゐり給ひて物語などし給ふに云々の條 (春曙抄卷七)  
 五月ばかりに月もなくいとくらき夜云々の條 (春曙抄卷七)  
 故殿などおはしまさで世の中に事出でき云々の條 (春曙抄卷七)  
 故殿の御服の頃六月晦日の御祓といふ事に云々の條 (春曙抄卷八)  
 宰相中將齊信宣方の中將と參り給へるに云々の條 (春曙抄卷八)  
 この三月晦日細殿の一口に殿上人あまた立てりしを云々の條 (春曙抄卷八)

弘徽殿とは閑院の左大將の女御をぞ聞ゆる云々の條 (春曙抄卷八)  
 村上の御時雪のいと高う降りたりけるを云々の條 (春曙抄卷八)  
 御形の宣旨五寸ばかりなる殿上わらはの云々の條 (春曙抄卷八)  
 細殿に便なき人なむ曉に笠さゝせ出でける云々の條 (春曙抄卷九)  
 三條の宮におはします頃五日の菖蒲の輿など持ちて云々の條 (春曙抄卷九)

(抄卷九)

十月十餘日の月いとあかきにありきて物見むとて云々の條 (春曙抄卷九)

成信の中將こそ人のこゑはいみじうよう聞き云々の條 (春曙抄卷九)  
 大藏卿ばかり耳とき人なしまことに蚊のまつげの云々の條 (春曙抄卷九)

賀茂へ詣づる道に女どもの新しき折敷のやうなる云々の條 (春曙抄卷九)

八月晦日がたに太秦にまうづとて見れば云々の條 (春曙抄卷十)  
 いみじうしたてゝ婿取りたるにいと程なく云々の條 (春曙抄卷十)  
 世の中になほいと心憂きものは人に憎まれむ云々の條 (春曙抄卷十)  
 日のうらくとある晝つ方又いたう夜ふけぬ云々の條 (春曙抄卷十)



陰陽師のもとなる童こそいみじく物は知りたれ云々の條 (春曙抄卷十二)

十二月廿四日宮の御佛名の初夜の御導師きゝて云々の條 (春曙抄卷十一)

ある所に何の君とかやいひける人の許に云々の條 (春曙抄卷十二)  
初瀬に詣でて局にゐたるにあやしき下衆どもの云々の條 (春曙抄卷十二)

物ぐらうなりて文字も書かれずなりたり云々の條 (春曙抄卷十二)

等は春曙抄本に見えながらしかもこの本に缺けてゐる章段である。これ等の章段の内容は主として清少納言の経験した事實談であるから、このあたりはもと一冊にまとめられてゐたのが、ある時機に散佚し、爾後そのまま傳へられたではなからうかとの想像も出来る。しかしかくの如きは一の臆説にすぎない。

上述の如く前田本には春曙抄の本文中缺けた項目もあるが、しかし反對に、春曙抄に立てて無い項目もある。その中、主なるものについて例をあげて見ると、

夏はひいたうてり云々の條 (はるはあけほのゝ冊四オ)

冬は雪あられかちに云々の條 (同上)

かみのいろは云々の條 (同上四十五オ)

うすやうは云々の條 (同上四十六オ)

すゝりはこは云々の條 (同上)

ふては云々の條 (同上)

すみは云々の條 (同上)

かゝみは云々の條 (同上)

くしのはこは云々の條 (同上四十六オ)

火をけは云々の條 (同上)



たゞみは云々の條 (同上)

めもあやなる物云々の條 (めてたき物の冊十二ウ)

やんことなき所にをしなへたらぬ云々の條 (同二十四才より二十六ウに至る)

あえなき物云々の條 (同三十二オ)

心ゆるひなき物云々の條 (同三十三オ)

きゞにくき物云々の條 (同三十四オ)

ほいなき物云々の條 (同三十七オ)

まつしけなる物云々の條 (同五十七オ)

みるかひなき物云々の條 (同五十九オ)

したの心かまへすへき物云々の條 (同五十九ウ)

ふと心をとりにしてわろくおほゆる物云々の條 (同六十一ウ)

夜まさりする物云々の條 (同六十四ウ)

ほかけをとりする物云々の條 (同上)

くら人はつねにつかうまつりし云々の條 (同六十九オ)

めてたき物の人の名につきていふかひなくきこゆる云々の條 (同七十四オ)

四月ころもかへいとおかし云々の條 (正月一日の冊十一ウ)

六月二十よ日はかりにいみしうあつかはしきに (同十七オ)

いみしうあつきひる中にいかなるわさをせんとあふきの風云々の條

(同十七ウ)

またてやみもせずあふきをつかひくらしめて云々の條 (同十八オ)

みなみならずはひんかしのたいのひさし云々の條 (同十八オ)

七月十よ日はかりのひさかりのいみしうあつきに云々の條 (同二十

五ウ)

しも月のついたらちころにみそれたるあめうちふり云々の條 (同二十

五ウ)



九ウ)

かもの一のはしこそおかしけれましてりんしのまつりの云々の條

(同三十三ウ)

おほかたほそとのつほねなどにてはいつも云々の條 (同三十四オ)

十二月十日の月いとあかきにひころふりつもり云々の條 (同三十四

オ)

またいみたかへなとしてあか月にかへるにしのひたる云々の條 (同

三十五ウ)

つこもりの夜は内に猶つねよりもおかしき云々の條 (同三十六ウ)

人のむことその御てとはなやはぬよしわかき人々の云々の條 (同

三十七オ)

返くめてたきものはきさきの御ありさまこそ云々の條 (同三十八

オ)

すへて内わたりのやうによき宮つかへところは云々の條 (同四十一ウ)

おとこはかたちこまかにおかしけならねと云々の條 (同四十三オ)

おとこもまみいとよき人のなをしのでにほひほころひ云々の條

(同四十六ウ)

ひるはとまらてよるくくる人のよるひつる云々の條 (同四十九オ)

人のむこはものしりさかしきいとくし云々の條 (同五十一ウ)

又めのわらへのあこめなといとあさやかに云々の條 (同五十五オ)

道心あるはいとよき事なれとせ經する云々の條 (同五十八ウ)

よにわひしくおほゆる事はつかしき人の云々の條 (同六十六オ)

人のむすめみぬ人などをよしときくをこそはいかてとも云々の條

(同七十二オ)

わかき人のなにかしくれかしのしうものかたり云々の條 (同七十四



オ)  
みやつかへする人のそら事にても人にいはれむつかし云々の條(同七十五オ)

みやつかへ人なとこそはありくわらはへの云々の條(同七十六オ)  
うちふりたるいゑもしはてらのまへに松の木云々の條(同八十オ)

以上あげたものは前田本に一の項目として取扱はれてゐて、春曙抄本に取扱はれてゐないものゝ例である。勿論非常に錯簡が多いのであるから、右にあげた條項の中でも、その一部分が分れて他の條項に混入してゐるやうな場合もある。

次に一々の字句について云へば、他本によつて意の通じなかつた所が、この本によつて容易に解決するやうなことが少くない。又同様に、此の本のみでは意の通じない所で、他本によつて解決するやうなことも多い。古典は古いものだけ本文が正しいのが普通であるけれど、しかし時には後人が

意味の通じない所を勝手に加除するやうな事もあり得るから、いづれの本文が最も原形に近いかを斷言することは困難である。それ故に、前田本の學問的價值は、本文校定に際して、流布本で通じない意味を通ぜしむるといふ點にのみ存するとは云へない。むしろ他に類本の無い全く唯一無二の異本であるといふ所に、この本の學問的價值は認められなければならない。今回前田本枕草子が、枕草子研究の新資料として、ほとんど原本に變らず複製されたことは學界のために欣ぶべき事である。

## 五

前田侯爵家には、所謂前田本枕草子の外に、今一本珍しい寫本が藏せられてゐる。それは今回尊經閣叢刊の一として同時に複製された異本枕草子の殘缺本である。

この本には「四季物語歎之由ノ書」と昔人の外題である。この外題から見



れば、當時は長明の四季物語ではないかと考へられてゐたらしい。しかしこれが四季物語でないことは、筆者も氣がついてゐたらしいけれど、しかし清少納言枕草子の殘缺であることには、考へ及ばなかつたやうである。

この異本枕草子殘缺本の原本は、縦八寸九分、横六寸四分許の袋綴で、半面十一行に書かれてゐる。今複製した本は原本のまゝの大きさではない。縮寫したものである。

本書は、貞享四年後藤演乘と稱する人が、柳悅といふ醫者の手を経て、山科の渡邊了清と云へる人の藏本を書寫し、それを松雲公に上つたものである。もとこの本は長明四季物語と云ひ傳へられ、靈元上皇仙洞皇の叡覽に入れて四季物語との外題を賜つたらしい。原本の所持者は、門外不出の珍書として秘藏したらしく、その間の消息は、貞享四年四月廿二日後藤演乘書狀之内書抜として、複製本の卷頭に見える書面に詳しい。

後藤演乘の書狀によれば、了清所持の原本は美濃紙のやうなる紙に寫し

た本で、當時二百年許前に書寫された本のやう傳へられてゐたが、演乘の鑑定では百年計前の寫本であると見えたやうである。又原本には封付があつて、書寫することが出来なかつた所もあつて、そこは「是ヨリ封付して見へ不申候」とて、餘白一枚をのこしてゐる。演乘の書狀によれば、その封付の箇所は、三四十枚もあるやうかき高く見えてゐたやうである。なほ又その書狀の中に、「封付不申所未紙數七八枚も残り申候へ共急申物に御座候間先右之分寫申候」とあるのを見れば、終の方にまだ何か残つてゐたではないかとも思はれる。

さてこの本は前にのべたやうに枕草子の殘缺本であるが、系統から云へば堺本に屬する。即ち、無窮會文庫所藏の堺本の後半は、七月つこもりかたにはかに風いたうふきて云々にはじまり、たたその比耳にとまりし事を書たるなりに終つてゐるが、この本は、宸翰本の終の方の一段の途中、よるもめをさましおきゐつゝ云々にはじまり、堺本と同様の所で終つてゐる。



封付があつて書寫することの出来なかつた所は、堺本によつて補ふことが出来る。

堺本は前にも述べたやうに、あまり世の中に行はれなかつた本で、現在残つてゐる傳本も亦甚だ稀である。文學博士高野辰之氏所藏の古寫木枕草紙二冊は、堺本の古い形をそのままとゞめてゐると思はれる本である。その一冊は、全くこの複製本と同様の本である。又無窮會所藏の本も同様堺本の舊形を示す本であるが、今それ等の諸本と、この本とを比較するに、互に字句の異同があり、又章段の錯簡もあつて、兩々相助けて解決されるやうな場合が多い。堺本のやうな傳本少い古典は、たとひ殘簡零冊でも等閑に附し難い。今回育徳財團の複製した異本枕草子は、學界に貢獻すること少からざるを信するものである。

昭和二年十一月





終

